

【論文】 人口センサスに基づく中国の少数民族の比較研究

—漢族と少数民族—★

雲南大学発展研究院教授 呂 昭河
雲南大学発展研究院副教授 晏 月平
雲南大学発展研究院副教授 徐 曉勇

1. 研究の意義

米国の著名な現代化（近代化）理論の専門家の Inkeles は「国家が現代化する上で、人は基本的な要素の1つである。」と主張する（英格爾ス、1992）。つまり、国家が現代化を実現する上で、人の現代化は重要な条件であり、人の現代化なくして、国家の現代化は結局成功することができないということである。

資本主義は人類の現代化の道を切り開いてきたが、その発展においては不平等と不公正を代償とした。例えば、マルクスは『共産党宣言』の中で「資産階級が100年足らずの統治の間に創造してきた生産力は、過去の全ての世代が創造してきた生産力よりも多く、大きいものである。」と主張している（馬克思・恩格斯、1972）。中国のすべての民族が現代社会の中で遭遇する様々な変化や多くの困難は現代化理論を基礎に解釈できる一方で、新しい理論を構築する基礎にもなっている。中国における民族社会の現代化を出発点とし、西洋先進国の「単一的」な進化経路と規範理論の考え方にメスを入れ、民族社会の多様化の変遷状況、特徴および存在する問題を解釈し、各民族の人口成長モデルの変遷、就業、家庭、教育および健康状況などの民族間の相違性に焦点を当てて研究し、ここから民族間の多様性の変遷を描き出し、その要因の研究と政策的含意を抽出していきたい。

民族の現代化を研究することは、各民族の人口成長と社会経済の現代化の過程において表面化する問題に回答することである。また、社会経済の発展においてどのように各民族が合理的かつ全面的な発展を実現するのかという問題にも回答する。民族の現代化の研究の本質は、各民族の人口の構造変化と発展との関係を分析するもので、変動傾向を理解し、民族が現代化する過程の中でのそれぞれの影響要因を分析し、経済と社会の発展計画の制定、民族政策と社会経済政策の制定に対して、本研究は政策実施の基礎を提供し、重要な戦略意義をもち、中国が現代化するための必要条件を実現するものである。

2. 民族社会の現代化する道と選択

古典的な現代化理論において、国家の現代化は3種類の道がある。第1は、先進国の現代化の経験について行く戦略である。第2は、後進国が「追い付き追い越す」力を備え、西洋のやり方を利用しながら発展し、実際に追い越しを実現する。第3は、「現代資本主義は国民が単体で自主的に経済を形成したのではなく、貿易や国際分業の前提のもとに形成されたもので

★本稿は、呂昭河・晏月平・徐曉勇（2013）『民族人口現代化進程の族際比較研究—基于人口普查資料的分析—』雲南大学発展研究院、研究報告93を翻訳したものである。本号ではそのうちの第1章から第3章までを掲載し、残りを次号で掲載する。なお、翻訳は坂本博 ICSEAD 主任研究員が行ったが、難解な部分が存在するため、若干の改訂を行っている。

ある。」(塞繆爾亭頓, 1989)。西洋の現代化はこの世界システムの助けを借りて進められ、この状況下において、民族社会も世界経済のシステムに巻き込まれ、このシステムの資源の助けを借りて民族社会の発展を進める。これをまとめると先進国と発展途上国との間に、3種類のモデル(すなわち「連続モデル」、「隔離モデル」と「関連モデル」)が存在する(塞繆爾亭頓, 1989)。上述の発展経路の選択は人類社会の現代化の歴史的な経験の理論を総括するもので、この考え方を利用して民族社会の現代化が遅れた状況を分析し、構造改善を図ることができる。

第1に、中国の各民族が現代化する過程の違いは「中心-周辺」の2元構造の結果である。人口のほとんどを占める漢族が主に住む東部地域、特に沿海地帯は中国の現代化過程における先発地域で、辺境で少数民族が多く住む西部地区は現代化の中心から遠く離れており、現代化の周辺地帯で、現代化によってもたらされる福祉を得ることが難しく、各少数民族の現代化の過程は現代化の中心から後れをとっている。そして、現代化の資源配置において、「資本は中心部に集中する傾向があり、そのため、中心と周辺との双方の間の経済格差は経済が発展するにつれて拡大する。」(塞繆爾亭頓, 1989)。これにより、現代化の過程における「中心」と「周辺」は漢族と少数民族との間における現代化過程の違いだと考えられ、その是正のためには「中心-周辺」の2元構造を打ち破るしかなく、国家は各民族のために平等な発展の機会を提供し、最終的には各民族の発展と繁栄を実現させなければならない。

第2に、各民族の現代化も国家が経済資源を集中させる不均衡発展戦略を行い、積極的に比較優位地区に投資を進めてきた必然的な結果であり、偶然とはいえない。新中国の成立以降、国家は各民族、特に辺境の少数民族の発展に対して優遇政策を与えたが、資源に限りがあるため、不均衡発展を余儀なくされ、効果が得られなかった。結局、改革開放で、国家主導による資源の「成長極」への集中が形成された。「成長極」例えば深圳、珠海などの経済特区は中国の改革開放実行模範地区となり、「成長極(特区)」から「成長帯(沿海)」や「成長域(東部地域)」といった経済成長の空間的拡散を形成した。国家主導の「成長極」戦略は不均衡発展の選択であるため、辺境の民族地区における発展のための生産要素の流出を招き、民族の経済発展における生産要素の欠乏を強め、各民族の現代化発展に必要な資源がひどく欠乏し、自力で成長できず、「中心」地域に頼る形の地域構造となってしまった。

第3に、伝統的な経済成長理論による成長の実践モデルが間違った方向に誘導された。中国の現代化は資本の集中と投入を重視し、資本以外の生産要素の地域経済発展に対する効果を軽視した。発展戦略の方向が単一で、発展手段も欠乏し、甚だしきに至っては民族の現代化の本来進むべき発展経路からも離れていった。

3. 人口センサスデータに基づく統計分析

人口の現代化する過程は、人口成長モデル、素質や構造などが伝統モデルから現代モデルに変遷する歴史過程である。先進国の人口現代化は比較的緩慢で、社会経済と文化が交わり、その人口システムの内部から自然発生的に成長する特徴を持つ。一方、中国の人口現代化は急速で、外部の力により進められてきた。出生モデルの変遷が中国の人口現代化の過程をよく示し

ており、その始まりは20世紀の70年代の初めであるとされている。ここでは、中国における人口の現代化する過程を「第3次（1982年）」、「第4次（1990年）」、「第5次（2000年）」、「第6次（2010年）」の人口センサスのデータを用いて、漢族と55の少数民族全体に分けて比較分析を行う。

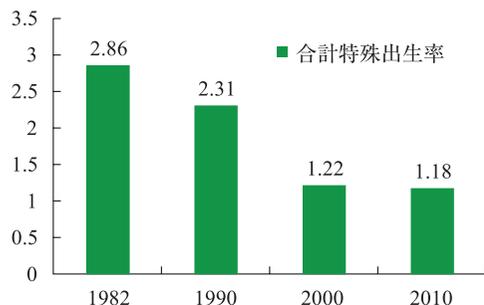
3.1 人口成長モデルの変化

現代型人口成長モデルは出生モデルと死亡モデルの現代化変遷である。ここでは合計特殊出生率、出生率、死亡率の3つの指標で現代型人口成長モデルを構築した上で、各民族の基本的な特徴と相違性を示す。

(1) 合計特殊出生率

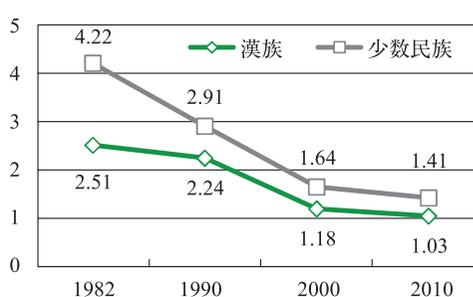
4回の人口センサスの結果（図1）を見る限り、過去30年間における中国の合計特殊出生率は明らかに下降傾向にある。1982年の2.86から2010年には1.18まで下がり、その下降率は58.7%に達した。特に1990～2000年の間で下降速度がもっとも速く、年平均下降率は6.65%に達する。1982年の出生率は2.86で、人口数を維持できる水準（人口置換水準）の2.1より高く、高い出生レベルにあった。1990年には2.1に近づき、2000年には2.1を下回る1.22まで下がり、それ以後も下降傾向が続き、2010年には1.18まで下がっている。国連の推計によると、2005～10年における中国の合計特殊出生率は1.4で、先進国平均の1.6を下回り、日本、ロシアなどといった「超低出生レベル」に近づいている（UN Department of Economic and Social Affairs, 2009）。中国が比較的高い出生率から「超低出生レベル」に急速に転換した要因は複雑で、経済社会構造の変遷を経験したことによる文化や思想観念の変遷も重要な影響要因となっているが、国家が低出生政策（いわゆる1人っ子政策）を強化・推奨し、出生に大きく関与したことが直接的な要因であると思われる。

図1 中国の合計特殊出生率の変化



（出所）各回の人口センサスより計算（以下断わりのない限り同じ）

図2 合計特殊出生率の民族別変化



漢族と少数民族それぞれの合計特殊出生率も同様に下降傾向にある（図2）。漢族の合計特殊出生率は1990年には2.24で、2000年には1.18まで下がり、すでに低出生段階に入っている。少数民族の合計特殊出生率は長期にわたり漢族より高く、1982年は4.22に達し、漢族より1.71高いが、それ以後の下降速度は明らかに漢族より速く、1990年には2.91と、漢族との差を0.67にまで縮め、2000年と2010年における差はそれぞれ0.46、0.38となっている。出生率の変遷過程を見ると、漢族と少数民族はともに急速な現代化が進んできたことがわかるが、両者が異なる点は少数民族のほうが低下の起点が遅いということである。1982年における少数民族の合計特殊出生率は4.22で、典型的な拡張型高出生モデルに属していたが、1990年代の中後期によりやく現代型出生モデルとなり、この間10数年が経過している。少数民族の合計特殊出生率の下落は漢族に遅れること約10年であるが、変遷速度は漢族より明らかに速い。また、2010年には漢族も少数民族も合計特殊出生率がともにかなり低くなっている。

(2) 出生率と死亡率

一般的に言えば、人口成長モデルは3段階あるいは3タイプに分けることができる：原始型の人口成長モデルは、高出生率、高死亡率による低自然成長率である；伝統型は、高出生率、低死亡率による高自然成長率である；現代型は、低出生率、低死亡率による低自然成長率である。表1は人口成長パターンと人口の転換段階の参考指標を示したものである（羅・呂，2007）。

表1 人口成長パターンと人口の転換段階の指標

人口成長パターン	原始型		伝統型		現代型
	高位安定	初期加速	中期拡張	後期減速	低位安定
出生率（‰）	40以上	35程度	25～35	20程度	15以下
死亡率（‰）	35以上	20程度	10～15	10程度	10以下
自然増加率（‰）	5以下	15程度	10～25	10程度	5以下

（出所）羅・呂（2007）

図3 中国における出生率と死亡率の変化

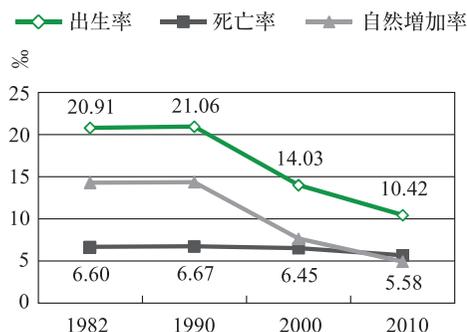


図4 出生率と死亡率の民族別比較

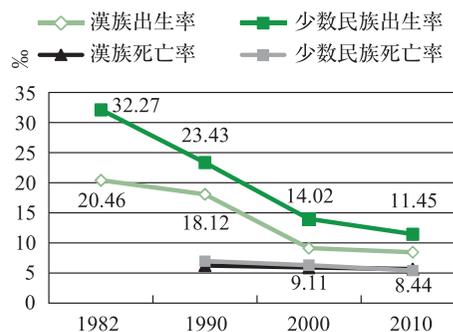


図3では1982～2000年にかけて死亡率が6.45～6.67%と比較的安定しているが、2010年は少し下がって5.58%となっている。出生率は2000年に大幅に下落し、1982年と1990年はそれぞれ20.91%と21.06%であったが、2000年、2010年にはそれぞれ14.03%、10.42%まで下がっている。死亡率が基本的に安定的であるため、中国のここ30年にわたる人口の自然変動の構造は出生率が主導的になる。中国の人口成長は1982年において伝統型の後期減速段階にあり、2000年には伝統型の後期から現代型への移行段階にあり、2010年に現代型の人口成長パターンとなってきたことを示している。同時期の世界の各国の指標と比較すると、中国も先進国家の仲間入りを果たしたことになる。

出生率と死亡率の指標から中国における人口成長モデルは現代化に移行したものと考えることができる。1982～2010年にかけて漢族と少数民族の出生率の変化の軌道と合計特殊出生率の変化の軌道は基本的に一致し、下降傾向を示している（図4）。しかも族間の差も縮小している。2010年における漢族の出生率は8.44%で、少数民族は11.45%である。1982年における両者間の11.81ポイントの差が3.01ポイントまで縮小している。死亡率の変化は比較的小さいが、2010年の少数民族の死亡率が初めて漢族を下回った。

3.2 人の素質の現代化の過程

(1) 身体素質

身体素質を評価する指標は多いが、その中で乳児死亡率と平均寿命がよく使われる。1982年以降、中国の乳児死亡率は下降し続けている（図5）。1982年で40%近くあったものが、1990年、2000年は30%以下まで下がり、2010年には20%となっており、世界平均の42%をはるかに下回っているが、先進国平均の6%とは開きがある。平均寿命は死亡率の高さを反映した指標である。寿命が長ければ社会として人が死亡していくリスクが低いことを意味し、身体素質も高いといえる。1982年の平均寿命は67.9歳で、2010年は74.0歳と、世界平均より5歳高くなっているが、先進国の78歳よりは低い。

図5 中国の寿命予測（左、単位：歳）と乳児死亡率（右、単位：‰）

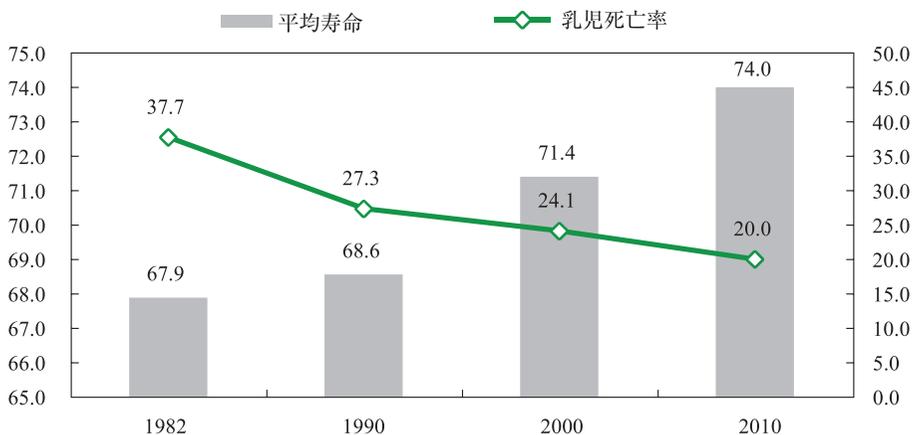
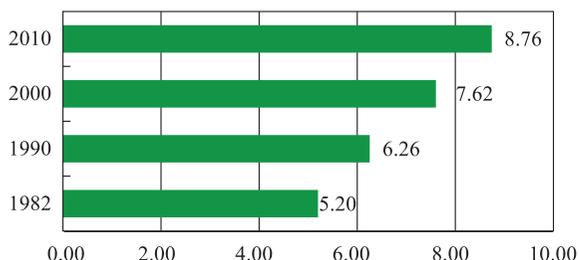


図6 中国の平均教育年数（単位：年）

表2 漢族と少数民族の平均教育年数
(単位：年)

	1990	2000	2010
漢族	6.34	7.70	8.84
少数民族	5.29	6.69	7.84

(2) 文化素質

現代化の状況の下で、文化素質を示すものとして、人々が受けた教育年数、一般的には1人当たりの教育年数があげられる。1982年における中国の平均教育年数は5.2年であるが、以降は増加傾向にある(図6)。1982～90年にかけて1.06年増加し、1990～2000年にかけては1.36年増加、2000～10年には1.14年増加した。2010年における全国の大学学部(本科)と大学院(研究生)の学歴を持つ人口数はそれぞれ4,562.58万人と413.86万人で、2000年と比べてそれぞれ222.43%、368.22%増加した。ここ30年の中国の文化素質は極めて大きく上昇したが、先進国と比べると依然として遅れている状態である。1999年の先進国の平均教育年数は15.29年で、2010年の中国に比べて6.53年長い。

1990年以降、義務教育の普及に伴い、漢族と少数民族の文化素質は着実に上昇しているが(表2)、少数民族の教育年数のほうが明らかに漢族より短い。漢族と少数民族との間の差は基本的に1年程度で、民族間の発展の違いによる差は出ていないものの、全般的に年数が短く、現代的な生産や社会構造の要求に対して大きな開きがある。

3.3 人口構成の変化

人口構成は人類自身の存在した自然なシステムの内部の構造の安定性とバランスを表現し、人口の社会構成は人類システム全体における各層関係と各領域の状態と特徴を反映したものである。

(1) 人口の自然構成

人口の自然構成は主に性別年齢の構成を示す。ここ30年の中国の総人口における男女性別比(女性を100とした男性の比率)は絶えず高い傾向にある。1982～2000年において106以上の高い性別比があったものの、2010年の中国の総人口における男女性別比は104.9で、総人口については男女の出生比率の不均衡の状況は改善が見られ、やや固定的になっている(図7)。

出生乳児の性別は総人口の性別比にもっとも直接的な影響を与えるため、もっとも重要な指標となる。この指標が103～107を上回ると正常ではなくなるが、1982～2010年の間における中国の出生乳児の性別比は著しく上昇している。1982年の時点で107.6と、すでに107の上限を上回っているにもかかわらず、2010年には118と上昇し、自然の範疇を越えてしまっている。もっとも、急激に上昇しているのは1982～2000年の間で、2000年以降は変化が小さく、

図7 中国の男女性別比の推移（女性 = 100 に対して）

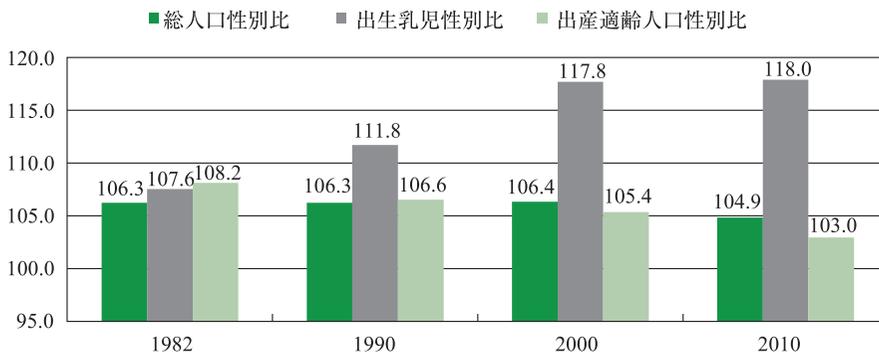


図8 2010年における全国人口センサスにおける年齢別男女の死亡率比較（女性=1に対して）

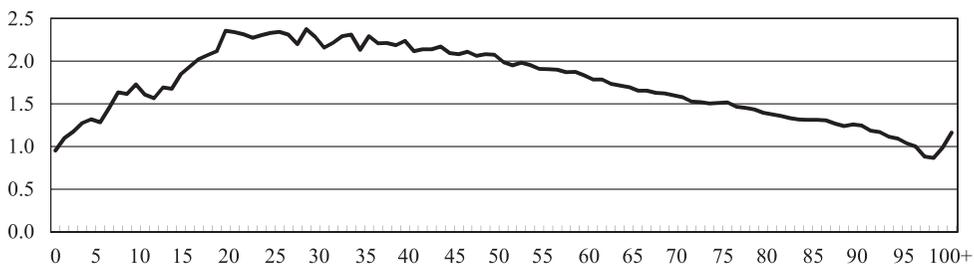


表3 漢族と少数民族の男女性別比

	1982	1990	2000	2010
漢族	105.6	106.1	106.3	104.9
少数民族	103.7	105.1	105.9	104.8

わずかに上昇する程度である（図7）。

図8は2010年における年齢別の死亡率の男女比を示したもので、縦軸は女性の死亡率を1とした時の男性の死亡率の比率を示す。男女比は当初年齢が増加するにつれて上昇し、成人段階の差が大きく、16～49歳の男性の死亡率は女性の2倍以上である。中高年になるにつれてこの差が徐々に縮小し、全体としては逆U字型となっている。これは死亡率の性別比が総人口の性別比に対して、年齢が上がるほど性別比が小さくなることを意味する。

漢族と少数民族との人口の性別比の変化は全国と異なり、当初上昇してから下落する傾向となっている。漢族と少数民族いずれも2000年の比率が最も高く、少数民族のほうが変化の幅が大きい。漢族の場合、1982～2000年までの男女性別比の変化は0.7の増加であるが、少数民族の増加は2.2である。1982年における両者の性別比の差は1.9と最大であるが、2010年には0.1まで減少している。また、漢族は1990年および2000年で106を超えたが、2010年には105を下回っている。少数民族の性別比はいずれも106に達していない（表3）。漢族の出生乳児の性別比は1982年で107近く、1990年も高く、2000年で118.6に達し、それ以後は118以上で推移している。少数民族の出生乳児の性別比も上昇傾向にあり、1990年は107.1、2010年

は114.3となっている。

さらに、図9では過去4回の人口センサスより年齢別の人口ピラミッドを比較している。ここでは、人口構成が拡張型から縮小型になっている点と、幼児人口の比率が急速に下落し、高齢人口の増加が加速していることが分かる。

1982年の0～4歳、5～9歳の人口比率は9.43%、10.98%で、すでに10～14歳、15～19歳の人口比率より低くなっており、人口が減少する状態となっている。しかも、2000年、2010年における低年齢層の人口減少はさらに明らかで、この2回のセンサスにおける0～4歳、5～9歳の人口比率はそれぞれ5.55%、7.26%と5.66%、5.32%である。1990年で0～4歳の人口が若干増えているものの、全体的には低年齢層の人口が減少しており、人口のピラミッドは2時点にピークを持つ「2層型」であることは分かる。

出生人口の減少は必然的に中高年の人口比重の上昇をもたらす。2010年における、14歳以

図9 各人口センサス時における人口ピラミッド（単位：％）

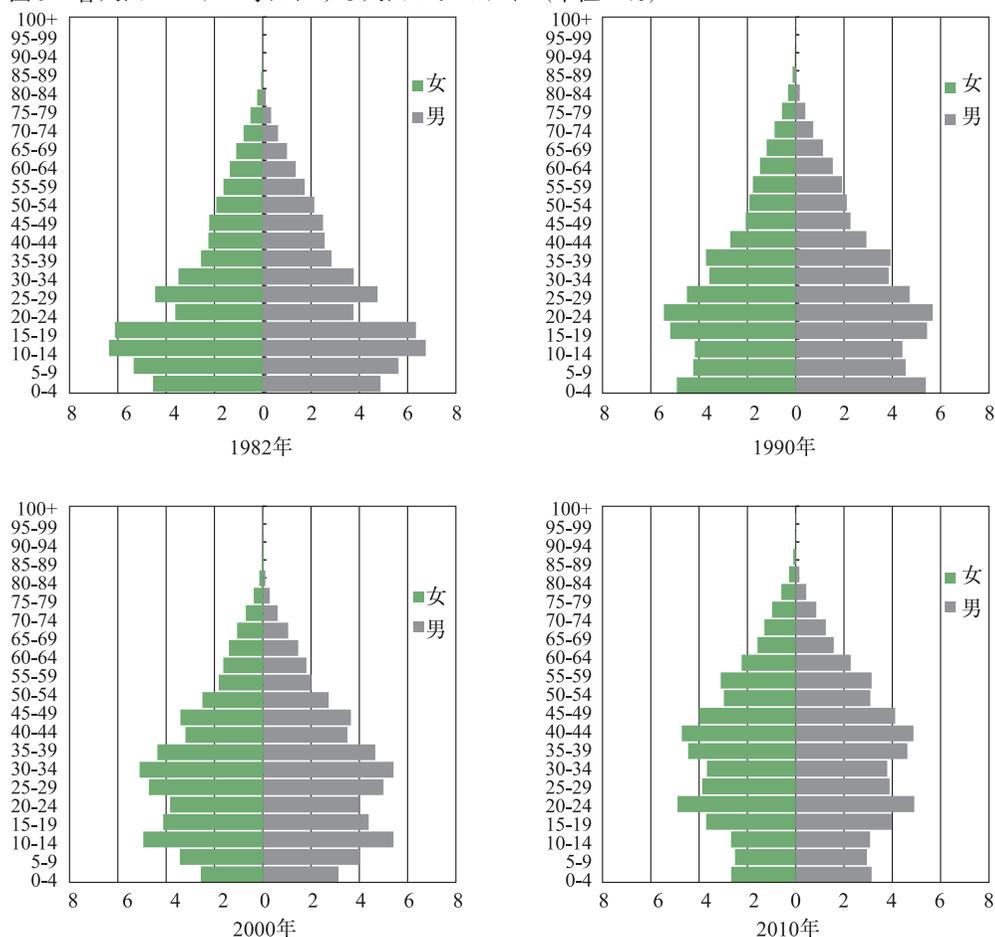
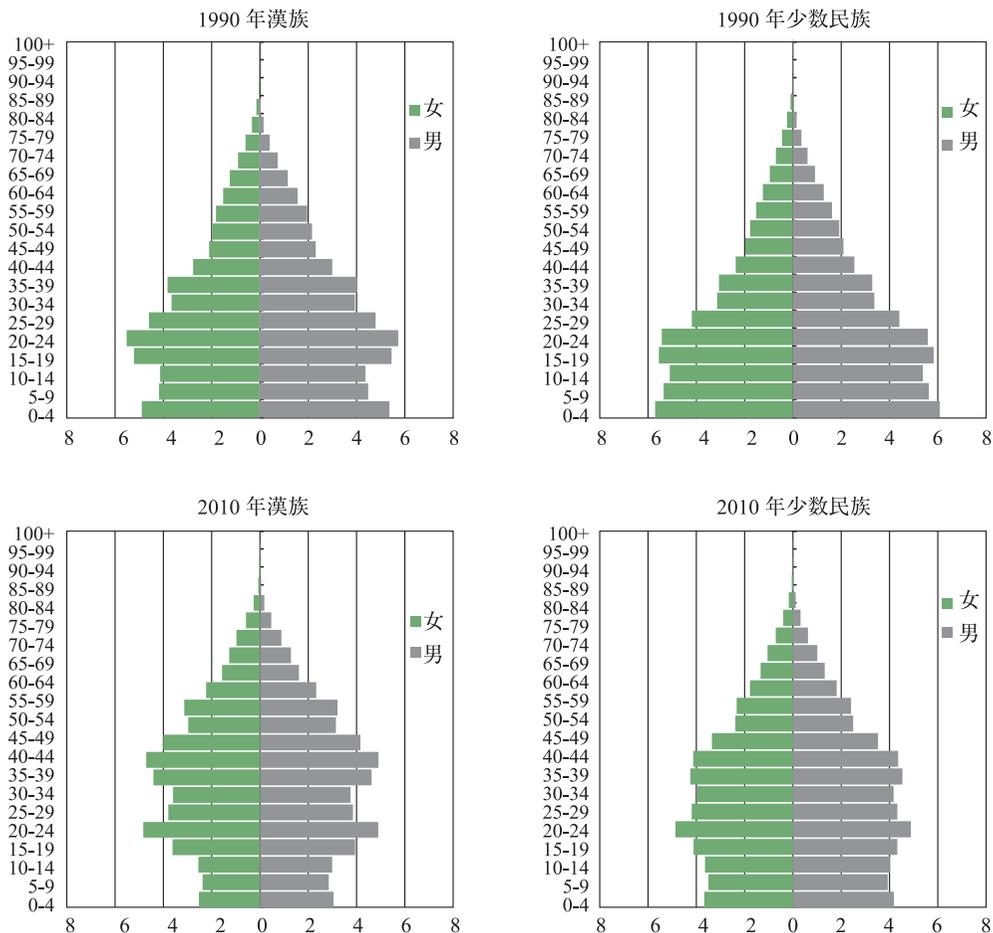


表4 各人口センサスにおける年齢構成

	14歳以下 (%)	15～64歳 (%)	65歳以上 (%)
1982年	33.59	61.50	4.91
1990年	27.69	66.74	5.57
2000年	22.90	69.97	7.10
2010年	16.61	64.57	8.82

図10 1990年と2010年における漢族と少数民族との人口ピラミッド (単位: %)



下の人口の比率は1982年に比べて16.98%減少し、同時に65歳以上の人口の比率を引き上げている。65歳以上の人口は1982年の4.91%から8.82%まで増加し、年齢の中央値も22.91歳から34.5歳に上昇している(表4)。民族別の比較では、人口の年齢構成の変化は漢族が先で、

少数民族が後といった特徴を持ち、ともに出生率の低下が、人口減少ならびに高齢者人口の比率の上昇をもたらせている。人口の年齢構成の変遷違いがあり、漢族と少数民族の人口ピラミッドを見ると、1990年の時点で漢族はすでに低年齢層が縮小している（図10）。

1980年代後期に出産制限が緩められ、1986～90年の出生人口が若干増加し、「2層型」となっていたが、低年齢層の縮小と高年齢層の拡大の傾向には影響を与えなかった。この段階における少数民族の人口構成は、依然として低年齢層の比率が高い拡張型の人口成長パターンに属していたが、やがて14歳以下の低年齢層の人口が減少するようになる。2010年には、少数民族の人口ピラミッドの底が縮み、頂上が拡張している。漢族においてはすでに底が大きく縮み、「紡錘型」となっている。

人口高齢化の過程を民族別に比較すると、少数民族の高齢化は漢族より約10年遅れている。表5において、1982年と1990年の違いはあまり大きくなく、両者の違いは14歳以下の人口比で、漢族と少数民族との差は6.01ポイントから10.82ポイントまで拡大している。少数民族の高齢化は明らかに漢族よりも遅く、2000年における少数民族の65歳以上の人口比率は1990年から0.27ポイントの増加にとどまり、2010年には6.99%に達するが、まだ、高齢化人口比率の臨界点である7%付近である。

(2) 人口の社会構成

人類の現代化する過程は伝統的な農業社会から現代の工業社会に発展変化する過程である。2010年における中国の都市人口は6.62億人に達し、農村人口とほぼ同じで、都市化率は49.68%である。1982年より中国の人口の都市化が加速態勢となり、1990年より加速が始まった（図11）。現在の中国の都市化率は世界平均に達しているが、先進国平均の75%には遠く及ばない。漢族人口の都市化率は全国平均を少し超え、1990年の少数民族の都市化率は16.36%で、

表5 各人口センサスにおける漢族と少数民族との年齢構成（単位：%）

	民族	14歳以下 (%)	15～64歳 (%)	65歳以上 (%)
1982年	漢族	33.19	62.04	4.77
	少数民族	39.20	56.40	4.40
1990年	漢族	27.13	67.20	5.67
	少数民族	37.95	56.84	5.21
2000年	漢族	22.46	70.29	7.25
	少数民族	27.65	66.87	5.48
2010年	漢族	16.07	74.83	9.10
	少数民族	22.43	70.58	6.99

図 11 中国の都市化率（単位：％）

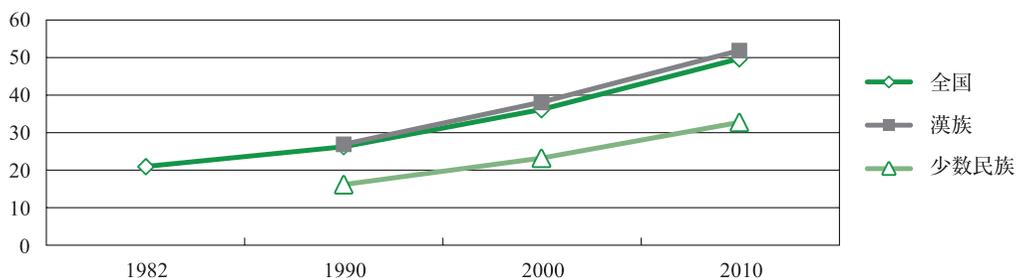


表 6 漢族と少数民族の産業別就業構造（単位：％）

年	漢族			少数民族		
	第1次産業	第2次産業	第3次産業	第1次産業	第2次産業	第3次産業
1982	72.88	16.60	10.52	85.13	5.97	8.90
1990	71.34	15.99	12.67	83.36	6.83	9.81
2000	62.99	17.70	19.31	78.85	7.57	13.58
2010	46.42	25.26	28.32	69.42	12.15	18.43

漢族より 10.7% 低く、2010 年は 32.84% で、漢族との差が拡大している。

表 6 は、4 回のセンサスにおける全国の産業別の就業人口の変化を示したものである。全国の就業人口の構造変化と都市化の構造変化の傾向は非常に似ており、第 1 次産業の就業人口の比重は着実に下がり、第 3 次産業は着実に増加している。漢族の就業構造の変化は全国と似ており、「123」の構造から「132」の構造に変わっている。漢族と比べて、少数民族の就業構造は 2 つの特徴をもつ。第 2 次産業の就業を吸収する能力がきわめて弱く、第 2 次産業の就業比率は 1982 年が最低で、5.97% となっており、2010 年には 12.15% に増加しているが、第 3 次産業の増加速度よりは遅い。第 1 次産業の就業人口の比率が高く、2010 年においても 69.42% で、漢族の 1990 年代中期の水準に相当する。

4. まとめ

中国における人口の現代化の過程について、本研究では 1982 ～ 2010 年までの 4 回の人口センサスデータを用いて時系列の変化を漢民族と少数民族との比較で分析した。そして、55 の少数民族の人口の現代化過程は漢族と比べて明らかに停滞していることが判明した。もちろん、これは少数民族全体について出された結論であり、少数民族内部でも違いが存在するため、この違いを知るためには、民族別に比較研究する必要がある。

参考文献（出現順）

- 英格爾斯(Alex Inkeles), 顧昕訳(1992)『從伝統人到現代人』中国人民大学出版社(原文はInkeles, Alex and David Horton Smith (1974), *Becoming Modern: Individual Change in Six Developing Countries*, Cambridge, MA, US: Harvard University Press.)
- 馬克思(Karl Marx), 恩格斯(Friedrich Von Engels) (1972)「共産党宣言」, 『馬克思恩格斯選集(第1卷)』人民出版社(原文はMarx, Karl and Friedrich Von Engels (1848), *Manifest der Kommunistischen Partei*)
- 塞繆爾亨廷頓(Samuel Phillips Huntington) (1989)『变化社会中的政治秩序』三聯書店(原文はHuntington, Samuel Phillips (1968), *Political Order in Changing Societies*, Yale University Press.)
- UN Department of Economic and Social Affairs (2009), *World Fertility Patterns*, 2009.
- 羅淳, 呂昭河(2007)『中国東西部人口發展比較研究』中国社会科学出版社